

〈論文〉

『コールドマウンテン』におけるウィリアム・バートラム

田中恒寿

ウィリアム・バートラムは1739年にペンシルバニアで生まれた博物学者であり、その博物誌的な著作『旅行記 (*Travels through North and South Carolina, Georgia, East and West Florida, the Cherokee Country, etc.*)』(1791)は、ギルバート・ホワイトの『セルボーンの博物誌』(1789)やジョン・ジェームズ・オーデュボンの『アメリカの鳥類』(1827-38)などと同様、ネイチャー・ライティングの源流に位置付けられる。

父親のジョン・バートラムも著名な博物学者で、ウィリアムは父親の集めた標本を描くことで、博物画家としての才能をまず開花させる。バートラム親子が発見し、ベンジャミン・フランクリンにちなんで「フランクリニア」と名付けた植物は、後のマニアによる乱獲で野生からは姿を消したが、バートラム親子が種子を採取しておいたおかげで絶滅を免れた。このフランクリニアの絵は、ウィリアムの最高傑作の一つと評されている。30代のころ、ウィリアムは合衆国南部を広く探検調査した。その時の日記をもとに1791年『旅行記』を出版することになる。折しも、アメリカの独立戦争はウィリアムの仕事を取り巻く状況にも大きな変化をもたらした。1776年には故郷に戻り、絵画と執筆中心の生活に入る。渡り鳥の研究にも手を染め、後半生は父と作ったバートラム・ガーデンで余生を送った。1823年没。

『旅行記』の文章は科学者としての明晰さと、詩人としての情緒をあわせ持つ。時には後者が勝ちすぎる場合もあることは、チャールズ・フレイジャー『コールドマウンテン』の中に引用された部分からもうかがうことができる。その情熱的な自然描写は、のちにコールドリッジやワーズワースなど、イギリス・ロマン派の詩人にも影響を与えた。

一方、チャールズ・フレイジャーの小説『コールドマウンテン』(1997年)はアメリカの南北戦争に題材をとった恋愛小説である。主人公は脱走兵のインマンと、美人で都会育ちのエイダ。インマンは南軍の兵士として従軍するが、ピーターズバーグの戦いで負傷し、病院で療養中に脱走して、故郷コールドマウンテンを目指す。エイダは牧師の父とチャー

ルストンからコールドマウンテンに移り住んできたが、父に死なれた後、どうやって生活していったらいいか途方に暮れていたところ、土地の娘ルビーとの共同生活によって、生きるすべを学んでいく。

小説は20の章とエピソードからなるが、カットバックの手法が用いられ、奇数章はインマンが、偶数章はエイダが中心となって話が展開していく。物語の初め、二人は遠く離れて——ピーターズバーグからコールドマウンテンまで、直線距離で400キロメートルといったところだろうか——それぞれの生を生きているが、インマンの逃避行が進むにつれて、コールドマウンテンに住むエイダとの距離が縮まっていく。18番目の章「雪についた足跡」では、カットバックが同一章内で行われるようになり、章の終わりでついに二人は再開を果たす。

インマンが登場する奇数章は、ロードムービーのごとく、一話完結のエピソードの積み重ねだ。が、インマンの旅程を俯瞰的に眺めてみれば、煉獄において様々な試練を乗り越えながら魂が浄化されていくように、インマンを取り巻く自然が純化され透明感を増していく。浄化されるのはインマンの魂というよりはむしろ、周囲の自然である。旅ゆくインマンの小脇にはパートラムというレファレンスがあった。パートラムの行間から想像力によって立ち上がるコールドマウンテンは、常に清浄な姿を保ち続けていた。

コールドマウンテンは標高1840 m、ノースカロライナ州のアパラチア山脈に位置する。かつてはチェロキー・インディアンのテリトリーだった。小説のエピグラフには「人間寒山道／寒山路不通」という寒山詩の一節が掲げられているが、寒山はコールドマウンテンから文字どおりの連想だろう。だがそれだけではなく、社会に背を向け、隠者として悟りの境地に遊ぶ寒山のイメージは、ある意味インマンにとって理想の姿かもしれない。傷ついたインマンの厭戦意識が、俗世間から超然とした寒山のような生き方への憧れをかき立てたとしても不思議はなかろう。しかし、寒山の道は世に通じない。インマンの生き様と末路を見事に予言したエピグラフではある。

コールドマウンテンで育ったインマンにとって、この山はアイデンティティーの支えである。コールドマウンテンが世界の山の酋長だと言われても何の不思議もない。

It was as if all the world might be composed of nothing but valley and ridge. During a pause in the play, Swimmer had looked out at the landforms and said he believed Cold Mountain to be the chief mountain of the world.¹⁾

スイマーはインマンが16歳の時に出会ったチェロキーの友人である。スイマーはインマ

ンの自然観、世界観に大きな影響を与えた。スイマー曰く、高い山の頂は天上の国に通じていて、そこで死んだ魂が生まれ変わる、という。インマンも目に見えない世界の存在を信じた。そして、腐敗したこの世界とは別の、もっと良い世界があって、その場所がコールドマウンテンであってもいいと思ったのだ。

But he could not abide by a universe composed only of what he could see, especially when it was so frequently foul. So he held to the idea of another world, a better place, and he figured he might as well consider Cold Mountain to be the location of it as anywhere.²⁾

ところでエピグラフといえ、寒山詩と並んで、チャールズ・ダーウィンも引用されている。「生物間で静かながら恐ろしい戦いが進行しているとは、なかなか信じがたいことだ。だが、それは平和な森でも、微笑む野原でも続いている。」生物間の戦いとは、南北戦争の当てこすりだろうか。生物間の静かな戦いに比べて、人間観の戦いは騒々しくて醜い。無益な殺戮合戦の様子は小説内でもあちこちで描写されているが、この戦いに背を向けたインマンも、一足飛びにコールドマウンテンの寒山的悟りの境地に到達するわけにはいかない。行く手を阻むのは脱走兵狩りの自警団だけでなく、穢れた泥の川であり、怪物のような鯰であり、有毒植物の暗いジャングル“dark jungle of venomous plants”³⁾である。

そもそもインマンは読む人として物語に登場する。「いま読んでいる本には、心を静めてくれる何かがある。」南北戦争に南軍の兵士として参加しピーターズバーグで首を負傷したインマンは、生死の境をさまよった後、病院送りとなってひと夏をベッドの上で過ごす。友とするのは病院に寄付された一箱の本の中から偶然に見つけた一冊、パートラムの『旅行記』第三巻だ。表紙のとれたみすぼらしい本だったが、インマンは毎晩、適当なところを開きながら拾い読みし眠りを待った。「これは心優しい孤独な旅人の記録。」山の描写を読んだ後には、自分の生まれたコールドマウンテンのイメージを重ね合わせる。結局、このパートラムが導きの糸のように、インマンを戦争から離脱させ、コールドマウンテンへ、さらにはエイダの元へと向かわせる。

ある一日をジプシーの団と過ごした。夜になってから、再びパートラムを繙く。石楠花と思しき記述⁴⁾が、甘美な夢へとインマンを誘った。その夢の中で、インマンはエイダと再会する。石楠花は見えない糸でインマンとエイダを結びつけるようだ。パートラムと同じように、エイダもまた絵の趣味がある。そのエイダは、父親のモンローが死んだ日、

石楠花を描きに出かけている。⁵⁾

インマンが脱走者となったのはかなり唐突だと言えるだろう。少年の日、教室から窓の外へ帽子を飛ばし、教師に取りに行くよう命じられてそのまま学校を辞めたときと同じように、ある晩病室の窓から抜け出し西へ、コールドマウンテンを目指して歩き始める。こうして、長いサバイバルの旅が始まった。「追跡を逃れるためには、道のない場所を行かなければならない。」

逃避行のはじめは病んで危険な自然との格闘が続く。南北戦争の、愚かな人間同士の格闘と対をなすようだ。「ここ全体が肉を食らう森になる。」「全身脂身だけのよう、ぶよぶよと締りのない怪物的な魚。」「この穢れた水を一滴も口に残したくない、と思った。」「いま、インマンは暗い有毒植物のジャングルに囲まれ、巨大で平らな無に漂う小さな頭になった。」自警団に対する警戒意識から「火を起こすことがためらわれ、道で拾ったリングで我慢」する。「周辺の落ち葉や枯れ枝を足で寄せ集め、寝床を作る。昼は寝て、夜歩く。安心なのは黒人奴隷ぐらいだ。」

夏も終わりに近づいたある日、洗濯女の弁当を失敬して（代価はちゃんと残しておいたが）かぶりつく。そのころ、食べ物と言え「玉蜀黍粥のほかは林檎と柿、盗んだメロン」といった有様だった。ひょんなことから道づれとなった牧師のピージと、午後には廃屋を見つけ、蜜蜂の巣箱から蜂蜜にありつく。さらに夕食は巨大な鯰。またある時はサイカチの実。「歩きながら親指で莢を割り、中の甘く白い果肉を歯でしごいて食べた。」食べ物か底をつけばサバイバル生活に頼るしかない。狩りが上手いかなければザリガニ、キノコ、胡椒草（カラシナ、ガーデン・クレス）と、口にできるものは何でも食べる。

ブルーリッジ山脈（アパラチア山脈の支脈のひとつ。コールドマウンテンもその主要なピークのひとつ）をはるか遠くに捉えるところまで近づいてきところで、インマンはある老婆と出会う。この老婆はさしずめ、心身ともにインマンを浄化する老賢者の役どころだろうか。山中に据えた馬車を家代わりに使うこの隠者は、家畜の山羊の生態を知りつくし、薬草にも造詣が深い。早速小さな山羊を一頭解体してシチューを作り、インマンの飢えを癒すとともに、首の傷には塗り薬を施し、薬草で作った丸薬、阿片チンキまで処方した。

さらにこの老婆のある種俗世間を超越した人格にも、インマンは少なからず影響されていく。「ここしばらく、この山羊飼いの老婆ほど心を開かせる相手に出会ったことがなかった。」インマンの放浪は魂の浄化へとみちびく巡礼の旅でもある。戦争の、そして俗世間の穢れを清めるかのごとく、インマンは歩き続ける。

He looked cowed and robed as a pilgrim from days of yore, a dark monk out
awander for the good of his soul, seeking remedy in walking from being fouled by
contact with the world.⁶⁾

すでに指摘したように、インマンにとってコールドマウンテンはアイデンティティーの
根拠であり、戦争で疲弊した心身の癒しの源泉である。そしてバートラムはインマンにとっ
て、コールドマウンテンというかけがえのない典拠を間近において疑似体験させてくれる
代償物であり、進むべき方向を誤らないよう指示してくれるコンパスでもある。

旅が終りに近づいてきたある明け方、早く目覚めすぎたインマンはバートラムを聞く。
バートラムの描く世界を心の中に思い浮かべると、コールドマウンテンの山巒が重なり合
う。その数日後、母熊を失った小熊を憐れんで息の根を止め、肉を無駄にしないためにゆ
で上げる間、夜明けとともに、周囲の山々が啓示のようにインマンの目の前に立ち現れた。

Rags of cloud hung in the valleys below Inman's feet, but in all that vista there
was not a rooftop or plume of smoke or cleared field to mark a place where man
had settled. You could look out across that folded landscape and every sense you
had told only that this was all the world there was.⁷⁾

夢にまで見たコールドマウンテンだ。巡礼が長年希求していた聖地を、はるか彼方から
ついに目の当たりにしたかのような瞬間であろう。ついにインマンは故郷と呼べる領域に
帰ってきた。心の支えであったコールドマウンテンを実際に視界にとらえたとき、単に嬉
しいだけではない。巡礼者インマンにあっては、体のバランスにも変化が起こる。

He rocked his head from side to side, and it felt to be balanced anew on his neck
stem. He entertained the notion that he stood unfamiliarly plumb to the horizon.⁸⁾

バランスよく首が座っている感覚。地平線に対して垂直立っている感覚。故郷は、コールド
マウンテンは、インマンの体に芯を通した。

それほどまでに、インマンはコールドマウンテンの *genius loci* と深く結びついていた
といえるだろう。チェロキー・インディアンの老婆が語ってくれた輝きの岩のむこうにある
戦いも病気もない平和な村のエピソード⁹⁾ は、インマンにとってコールドマウンテンに

帰還する行為にすり替えて実行される。七日間の絶食の末、輝きの岩の扉の前で待つインデアンのように、インマンはコールドマウンテンが近付くと、取えて食を断ち、襖をするかのように歩みを続けた。

こうして、パートラムとともに歩んだインマンの旅が終わろうとする。物語の最後の方でエイダと再会を果たしたインマンは、大切に携えてきたパートラムについて「世界におけるこの地域と、そこに含まれるあらゆる重要事項についての本だ」¹⁰⁾ だと説明する。インマンにとってパートラムはそれほど神聖かつ豊かさに満ち溢れた書物だったのだ。

一方、エイダは生活力の欠如した女性として登場する。サウスカロライナ州チャールストンで生まれ、父モンローは牧師としてコールドマウンテンの山間の村に伝道に来た。病氣療養を兼ねてのことだったが、それが6年前のことだ。

チャールストンで「女には毒だといわれるほどの教育を受けた」おかげでギリシア語からラテン語、ピアノに絵画、文学と豊かな教養を身に付けたが、コールドマウンテンでは何一つ役に立たない。五月に父が死んで以来、三百エーカーもある農場は荒れ放題で、エイダ自身も着の身着のままの暮らしを送っている。必要なものは金で買うことに慣れている彼女にとって、農作業は面倒以外の何物でもない。

すべてにおいて無気力で、生きる希望を失っていたエイダが、この地方独特の占いに興味を示すエピソードがある。井戸の水面に浮かぶイメージを手鏡に映してみると、木立に囲まれた坂道を歩く一人の男の姿が見えた。「森と、そこを通る道。男が歩いている。そのあとに従う運命だという思いと、待つ運命だという思いが交錯した。」¹¹⁾

インマンが旅する人、求める人だとすれば、エイダは定住する人、待つ人である。だが、都会育ちのエイダにとって、それはたやすい選択ではない。金の助けを借りず、自ら必要なものを作り出す仕事にかんして全く無能だったエイダを導く師匠はルビーだ。ルビーは生きていくのに必要なものはなんでもその土地で手に入れられるし、正しく作り上げられた世界なら、自分に割り当てられた場所での生活に馴染んで当然だ、という考えの持ち主である。

There was not one thing in a place like France or New York or Charleston that Ruby wanted. And little she even needed that she couldn't make or grow or find on Cold Mountain. She held a deep distrust of travel, whether to Europe or anywhere else. Her view was that a world properly put together would yield inhabitants so suited to their lives in their assigned place that they would have neither need nor

wish to travel.¹²⁾

土地を区別して畑だの果樹園だの、放牧地だのとプランニングするところから始めて、日々の労働もすべてルビーの指示で行われる。指導はなかなか厳しい。今いる場所の東西南北をつねに把握することから始めて、いざとなれば食用になる植物を一つ一つ教え込む。なかには到底初心者向けではないような要求も含まれる。風の音から木の種類を判別することもそのひとつだ。「少なくともポプラと樫を聞き分けるくらいのことができなくては」と、厳しい師匠ルビーとの共同生活は、確実にエイダを自然と共にある生活へなじませていく。

そしてエイダ自身も、ルビーによる教育＝自己変革を自分にとって好ましいものとして受け入れ、楽しんでいるようだ。燃やした薪の煙の匂いから樹種を嗅ぎ分ける能力を身につけられたらと望んだりもしている。初めのうちは面倒で、苦痛の種でしかなかった野良仕事も、月日を重ねるうち、その中に自然と一体になる貴重な瞬間を見いだせるようになっていった。

Working in the fields, there are brief times when I go totally without thought. Not one idea crosses my mind, though my senses are alert to all around me.¹³⁾

ところで、『コールドマウンテン』にはおびただしい数の動物や植物が登場する。さしずめ現代版パートラムといった趣さえ呈している。インマンにとって自然界を構成するこれらの要素は、人間的で調和のとれた存在のあり方を暗示する道しるべのようなものであり、動植物の影が濃ければ濃いほど、正常な感覚——南北戦争は狂気である——と幸福に近づくことができるかのようだ。

インマンは、ハックルベリーの実を見て、旅行鳩の大群を見て、元気づけられ、幸せな気分になったと、山羊飼いの老婆に打ち明ける。

So that morning he had looked at the berries and the birds and had felt cheered by them, happy they had waited for him to come to his senses, even though he feared himself deeply at variance with such elements of the harmonious.¹⁴⁾

戦争は日常の繰り返しや季節の循環から超越することによって人間を解放してくれるかに見えた。しかし、他の何物にも依存しない独立した季節（＝戦争）は、魅力的に見えて、

その実ひどく消耗させるものだった。戦争から一歩ずつ遠ざかろうとするインマンにとって、自然は相互依存の象徴であり、そのことによって安らぎをもたらす。インマンの旅は、相互依存の状態への回帰を志向したオデュッセイアであると言えるのかもしれない。

ここでは、風景の装飾以上の意味を持つ『コールドマウンテン』の動物相と植物相をリストアップしてみる。ただし、単純な言語上の比喻として用いられ、北米東部の自然とのかかわりが希薄なものは除いた。()内の数字は初出ページを示す。

《Fauna》

ape (205) 猿

azure butterfly (72) シジミチョウ

bat (21) 蝙蝠

bear (351) * インマンは熊になった夢を一週間見続け、二度と熊を撃たないと誓いを立てる(「熊への誓い」)

bee (154) 蜜蜂

bluebird (158) ルリツグミ * ヒタキ科ルリツグミ属

boar (87) 猪

bobwhite (63) コリンウズラ

boomer (61) 赤栗鼠? ヤマビーバー * ヤマビーバー科ヤマビーバー属

buzzard (173) ノスリ, コンドル

cardinal (176) カージナル, ショウジョウコウカンチョウ科

caterpillar (4) 芋虫

catfish (87) 鯰

cicada (70) 蝉

cock 鶏, hen, chicken, rooster (3)

coon (89) アライグマ

Cooper's hawk (175) クーパーハイタカ

corn borer (137) アワノメイガ

cow (4) 牛, cattle (162), bull, heifer

crab (417) 蟹

crawfish (194) ザリガニ

crow (42) 鴉 * 第1章「鴉の影」から最終章「鴉の魂が踊り」まで、『コールドマウンテン』は鴉に始まり、鴉に終わる。

deer (178) 鹿, buck
dog (45) 犬, bloodhound (439), wolfhound (439)
duck (175) 鴨, drake (398) 雄ガモ
finch (139) フィンチ *アトリ科
fly (6) 蠅
fox (378) 狐
frog (127) 蛙
gnat (72) 蚋
goat (267) 山羊 *「一日の遅れが, もう永久に」に登場する山羊飼いの老婆はインマンの導師でもある。
goose (161) ガチョウ, grey goose (175) ハイイロガン, white goose (175) マガン?, Canada goose (329) カナダガン
grebe (202) カイツブリ
grouse (262) 雷鳥
groundhog (82) ウッドチャック (マーモット) (比ゆ)
guinea (93) ホロホロ鳥
hare (120) 野兎 (比ゆ)
hawk (21) 鷹
headlouse (444) アタマジラミ
heron (21) 鷺, blue heron (192)
hinny (109) 駄騾 (雄馬と雌ロバの交配子)
hister beetle (369) エンマムシ *エンマムシ科
hog (41) 豚, sow (97) 雌豚, shoat (97) 子豚
horse (28), mare 牛
horsefly (72) 虻
jaybird (175) カケス
jenny (223) 雌ロバ
katydid (4) キリギリス (北米産, ひげが長い)
kingfisher (175) カワセミ
lark (175) ヒバリ
lizard (379) 蜥蜴
long-eared owl (315) トラフズク

- luna moth (71) ヤママユガ, ミズアオガ
mantis (137) カマキリ
martin (93) ショウドウツバメ, もしくはムラサキツバメ
merganser (265) アイサ *カモ科アイサ属
mole (380) モグラ *モグラ科
monarch (139) オオカバマダラ
mosquito (72) 蚊
mule (57) ラバ (比ゆ)
nuthatch (437) ゴジュウカラ *ゴジュウカラ科
nighthawk (85) 夜鷹
otter (261) カワウソ (比ゆ)
owl (47) 梟
oyster (140) 牡蠣 *チャールストン時代の思い出
panther (118) ピューマ (比ゆ)
passenger pigeon (176) 旅行鳩 (ハト科, 北米東岸, 20世紀初頭絶滅)
peeper (4) アマガエル
peregrine (386) ハヤブサ *ハヤブサ属
pigeon hawk (386) コチョウゲンボウ *ハヤブサ属
possum (20) オポッサム, フクロネズミ
quail (175) ウズラ
rabbit (283) アノウサギ
raptor (205) 猛禽
rat (177) ネズミ (比ゆ)
rat snake (235) ネズミヘビ *ナミヘビ科ネズミヘビ属
rattle snake (290) ガラガラヘビ
raven (176) ワタリガラス
red-tailed hawk (175) アカオノスリ
salamander (137) 山椒魚 *コールドマウンテンの近くにはサンショウウオ界の首都と呼ばれるグレートスモーキー山脈国立公園がある。
sheep (97) 羊
snake (87) 蛇 (比ゆ)
snipe (202) タシギ

- spider (360) 蜘蛛 (比喩)
squirrel (20) 栗鼠
stag beetle (325) クワガタムシ
swallow (21) 燕
swallowtail (139) キアゲハ
swan (175) 白鳥
terrapin (258) スマガメ
tick (72) ダニ
titmouse (43) 四十雀 *シジュウカラ科シジュウカラ属の各種小鳥
toad (233) ヒキガエル (比喩)
troll (261) トロール *想像上の生き物 (北欧伝説)
trout (18) 鱒
turkey (41) 七面鳥
uktener (20) ウクテナ *想像上の生き物 (北米インディアン), horned serpent とも
vulture (22) コンドル科の猛禽
water strider (240) アメンボ
wolf (47) 狼

《Flora》

- apple (91) 林檎, winesap (277)
angelica (37) アンゼリカ *セリ科シシウド属
ash (231) トネリコ *モクセイ科トネリコ属
aster (37) アスター属 *キク科
azalea (53) アザレア
balsam (51) *本来松脂のような樹脂を指すが、本書では樹種名として頻繁に用いられている。分布からするとカナダツガと思われる。
basswood (357) シナノキ シナノキ科シナノキ属
bean (55), white bean (269), string bean (448) サヤインゲン
bearberry (352) クマコケモモ *ツツジ科
beardtongue (77) イワブクロ
beech (176) ブナ
bindweed (266) ヒルガオ (などのつる性植物)

- birch (212) 樺, river birch (127) 水樺? *Betula nigra*
blackberry (50) ブラックベリー
blackgum (22) 沼水木 *ヌマミズキ科ヌマミズキ属
bolete (299) ヤマドリタケモドキ
boxwood (27) 柘植
bracken (263) シダ類, わらび
briar (214) イバラ
buckeye (357) トチノキ *トチノキ科トチノキ属
burdock (153) ゴボウ
cabbage (93) キャベツ
carrion flower (283) クササルトリイバラ *ユリ科サルトリイバラ属
catalpa (161) キササゲ *ノウゼンカズラ科キササゲ属
calycanthus (416) カリカンツス *ロウバイ科クロバナロウバイ属, パートラムからの引用
cedar (389) シーダー *マツ科ヒマラヤスギ属
chestnut (42) 栗
chickweed (69) ハコベ
chicory (17) チコリー
cockspur (394) アメリカサンザシ *バラ科サンザシ属
collard (133) コラード *ケールの変種, 食用
corn (42) 玉蜀黍
cotton (172) 綿
cress (299) カラシナ
cucumber (36) 胡瓜
dog hobble (139) *ツツジ科イワナンテン属 *Leucothoe fontanesiana*
dogwood (39) 花水木
ebony (200) 黒檀 (比ゆ)
fern (48) 羊歯
fir (376) モミ *マツ科モミ属
fleabane (37) ヒメジョオン, ノミヨケ草
foxtail (37) エノコログサ
fungus (216) 菌類, キノコ

- galax (155) ガラックス *イワウメ科
- ginseng (385) チョウセンニンジン *ウコギ科トチバニンジン属
- glycine frutescens (416) アメリカフジ (American Wisteria) *マメ科フジ属, パートラムからの引用
- goldenrod (139) アキノキリンソウ
- goldenseal (385) ヒドラスチス *キンポウゲ科, 抗菌剤
- gourd (93) 瓢箪
- heal-all (37) 万病草
- heath (351) *ツツジ科エリカ属・ギョリュウモドキ属などの灌木
- hemlock (51) ツガ属 *balsam がカナディアン・ヘムロックを指すとすれば, こちらはカロライナ・ヘムロックあたりか?
- hickory (4) ヒッコリー
- hawthorn (47) サンザシ
- honey locust (205) アメリカサイカチ *マメ科サイカチ属
- honeysuckle (210) スイカズラ
- horseweed (387) ヒメムカシヨモギ
- huckleberry (276) ハックルベリー *ツツジ科スノキ属
- Indian pipe (4) 銀竜草モドキ *シャクジョウソウ科シャクジョウソウ属
- Indian tobacco (153) ロベリアソウ *キキョウ科ミゾカクシ属 *Lobelia inflata*
- ironweed (139) ヤナギアザミ
- ivy (90) 蔦
- Jacob's ladder (265) ハナシノブ
- Jack pine (69) バンクス松
- jewelweed (445) ツリフネソウ *ツリフネソウ科ツリフネソウ属
- jimson (77) 朝鮮朝顔
- joe-pye weed (133) ヒヨドリバナ
- laurel (311) 月桂樹
- lavender (130) ラベンダー
- lawn (6) 芝
- leek (347) リーキ, ポロネギ *ヒガンバナ科ネギ属の二年草
- lettuce (93) レタス
- lichen (266) 地衣類

- lima (373) らい豆
- linden (449) 菩提樹 *子供に読み聞かせる本の中で
- locust (43) 針槐 *パングルの墓の十字架に。「針槐は生きる意志が強い。(「冬には黒い木肌で」)」
- magnolia (416) モクレン *パートルラムからの引用
- maple (73) 楓
- melon (183) メロン
- mildew (266) 白カビ
- milkweed (137) トウワタ *乳液を分泌する草
- mistletoe (377) ヤドリギ *ヤドリギ科ヤドリギ属
- moss (266) コケ
- mullein (153) ビロードモウズイカ *ゴマノハグサ科モウズイカ属
- mushroom (384) 茸 (比ゆ)
- myrtle (71) ギンバイカ
- oak (3) , turkey oak (245) トルコ櫨 , white oak (231) ホワイト・オーク *コナラ属
コナラ亜科コナラ節の総称
- okra (102) オクラ
- onion (93) 玉葱
- palmetto (35) 48 パルメット椰子
- pear (29) 洋梨
- persimmon (149) 柿 (実)
- pepper (50) 胡椒 , red pepper (267) , hot pepper (319)
- philadelphus (416) バイカウツギ *ユキノシタ科バイカウツギ属 , パートルラムからの引用
- pigweed (387) アカザ *アカザ科アカザ属
- pine (3) 松
- poke (28) 山牛蒡 *ヤマゴボウ科ヤマゴボウ属
- pole bean (166) つる性の隠元豆
- poplar (51) ポプラ *ポプラの巨木の下でスタブロットとパングルが処刑 (「だめだ、どうにもならない」)。
- poppy (277) 芥子
- potato (93) , Irish potato (102) ジャガイモ

- pumpkin (125) 南瓜, squash (102)
ragweed (30) 豚草
redbud (248) アメリカハナズオウ
red cedar (69) エンピツビャクシン
rhododendron (38) 石楠花 p.129 にパートラムの引用
rhubarb (108) ルバーブ
sage (269) セージ
saisal (205) サイザル麻
silver bell (357) アメリカアサガラ *エゴノキ科アメリカアサガラ属
slash pine (69) エリオット松
“snapweed” (37) ハジケグサ (エイダノ命名。触ると種がはじける)
snakeroot (179) *蛇に咬まれたときに効く草
sphagnum (350) ミズゴケ, ピートモス
spicebush (302) クロバナロウバイ *ロウバイ科クロバナロウバイ属 (*Calycanthus occidentalis*)
spruce (51) スプルース
spurge (93) 灯台草
strawberry (416) *パートラムからの引用
sumac (28) スマック (うるし)
summer savory (269) キダチハッカ
sweet gum (148) モミジバフウ *フウ科フウ属
sweet potato (102)
sycamore (233) プラタナス
tansy (120) ヨモギギク
thistle (278) アザミ *キク科アザミ属の総称, bull thistle (328) *ユーラシア原産, 二年草
tickseed (37) 錦鶏菊
tobacco (94) タバコ
tomato (28) トマト
tulip poplar (53) 百合樹
turnip (93) カブ
walnut (184) 胡桃 *クルミ科クルミ属

- wax myrtle (199) *ヤマモモ科の低木, 蠟 (ロウ) を採取
wheat (427) コムギ
willow (41) 柳
wort (358) ゼニゴケ
yarrow (93) 鋸草 *鎮痛効果 (銃で撃たれたインマンが頭に巻きつける。p.230)
yaupon (199) ヨーボン *モチノキ属の低木
yellow jessamine (416) カロライナジャスミン *ゲルセミウム科ゲルセミウム属, パートラムからの引用

このように『コールドマウンテン』では、インマンのサバイバル・ライフを縦糸に、エイダのナチュラル・ライフを横糸に物語が紡がれる。パートラムの『旅行記』はインマンにとって遠く離れたコールドマウンテンのアイコンであり、インマンがパートラムを肌身離さず持ち続ける限り、コールドマウンテンは磁石のようにパートラムを、そしてインマンを、引き寄せてくれる。ライアンによる「自然に関する文学：スペクトル」¹⁵⁾によると、パートラムの『旅行記』は「自然の経験を綴ったエッセイ」の中の「旅行と冒険」の項目に分類されているが、まさに『コールドマウンテン』におけるインマンの描かれ方と重なり合う。

一方、エイダのそれは、「スペクトル」の隣の項目「農場の生活」に分類されるべきだろう。都会育ちのエイダを農場でのナチュラル・ライフへ導くマーリンの役は、若いルビーが引き受ける。おかげでエイダは自然に関する知識を少しずつ身につけ、生活に必要なものはできる限り自分で生産して貨幣に頼らない術を学び、最後にはインマンの遺児とともに、コールドマウンテンの農場に根付いてたくましく生きていく。

マーリンと言えば、傷ついたインマンを癒し、コールドマウンテンへと向かうエネルギーを再注入してくれる山羊飼いの老婆こそがその名にふさわしいかもしれない。インマンにとっても脱走兵としての逃避行が、心身浄化のために必要な試練であったことを、このエピソードは強く印象付ける。

『コールドマウンテン』はその豊かな動植物相とあわせて、人間が土地や自然と共にあること、また人間が土地や自然の一部であることを再認識させてくれる小説である。

参考文献

Charles Frazier, *Cold Mountain*, Vintage Contemporaries Edition, New York, 1998.

*日本語訳は土屋政雄訳『コールドマウンテン』（新潮社, 2000年）を参考にした。

William Bartram, *Travels through North and South Carolina, Georgia, East and West Florida, the Cherokee Country, etc.*, Cosimo Classics, New York, 2010.

グレン・オーランド「米国南部の自然を愛したナチュラリスト ウィリアム・バートラム」『National Geographic』（2001年3月号）所収

トーマス・J・ライアン『この比類なき土地』（村上清敏訳）英宝社, 2000年

亀井俊介『アメリカの旅の文学』昭和堂, 2009年

注

- 1) Charles Frazier, *Cold Mountain*, p.19
- 2) *op.cit.*, p.23
- 3) *op.cit.*, p. 90
- 4) *op.cit.*, p.129
- 5) *op.cit.*, p.38
- 6) *op.cit.*, p.301
- 7) *op.cit.*, p.354
- 8) *op.cit.*, p.355
- 9) *op.cit.*, pp.250-2
- 10) *op.cit.*, p.415
- 11) *op.cit.*, p.50
- 12) *op.cit.*, p.243-4
- 13) *op.cit.*, p.326-7
- 14) *op.cit.*, p.276-7
- 15) トーマス・J・ライアン『この比類なき土地』 p.5